

わたしと協同組合

協同の仲間づくりから 社会参画の一步を

～ 二宮尊徳の思想と実践が息づく地域で ～



猪野正子

J Aはが野総代・J A栃木女性会顧問

いの・まさこ／1952年栃木県生まれ。結婚後、農業に従事し、旧物部農協の正組合員、若妻会に加入。1996年J A栃木女性組織なの花会会長、2008年栃木県女性農業士会会長、2010年J Aはが野理事、2011年J Aはが野女性会会長、2017年J A栃木女性会会長などを歴任。現在はJ Aはが野総代(地区選出、2021年～)、J A栃木女性会顧問(2022年～)を務める。約200ヘクタールの耕地面積(米、ムギ、ソバなど)を受託する(株)雄の副社長。イチゴの6次産業化を取り入れた農業経営にも力を入れる。

栃木県真岡市の旧二宮町は、江戸後期、二宮尊徳が復興に携わった地である。この尊徳精神の息づく地で、猪野正子さんは生まれ育った。人と人とのつながりを大切に農協運動のリーダーとして長年、農業や地域の活性化、女性の活躍推進に力を尽くす。その活動の底流には、人々が互いに作用し合い一体となって結果を生み出すという考え方、まさに「一円融合」の尊徳の思想があった。



10月中旬、真岡市では稲刈りが終盤を迎えていた。(株)雄では、最新鋭のコンバインを導入し、効率化をはかっている(左)。イチゴの部門は猪野さんが担当。『とちあいか』『とちおとめ』『ミルクベリー』『とちひめ』を計40アール栽培する

■ 農業の喜びや苦勞をコミュニティラジオで発信

平坦な土地に田んぼが広がる栃木県真岡市。この地でイチゴを栽培する猪野正子さんは農業経営者だけでなく、多彩な顔を持つ。

毎月15日の15時。この日時、猪野さんにとって特別な1時間が始まる。真岡市役所敷地内にある地域のコミュニティラジオ『FMもおか』のスタジオで、月に一度の番組のパーソナリティーを務める。

「ごきげんいかがですか。いちごの日、いちごの時間、『いちご一会、お元気ですか』」。開口一番、リスナーへの呼びかけで番組がスタート。BGMにはダ・カーポの曲『野に咲く花のように』が流れ、穏やかな雰囲気醸し出している。番組は、市内の行事・イベントなどの報告や、リスナーからのリクエスト曲の紹介、暮らしと関連したSDGsかるたの実演などバラエティーに富んだ内容で進行し、ラジオ局の局長と軽妙なトークを繰り広げる。この日は、イチゴ栽培で雇用しているパートさんとの作業着の会話や、今年の米価格の値上がりと生産の実状についてもふれた。

生放送を終えた猪野さんはこう話す。

「生産者として、毎月の農作業の様子を詳しく紹介しながら、農家の喜びや苦勞を伝えることを心がけています。生産者の思いを代弁するのはもちろん、消費者が知りたい農業や食の情報も発信しています。知り合いから『いつも楽しみにしてるよ』『農作業の励みになる』と言ってもらえるのがうれしいですね」



FMもおかのスタジオに入って、打合せもそこに生放送に入る。ふだん着の会話で、地域の魅力を発信している

2021年から始まった番組のなによりの特徴は、地元のタイムリーで身近な話題を提供していること。さらにお茶の間での会話を楽しんでいるような趣が、好評を博している理由である。

■ 「あなたもわたしもみんなが主役」を具現化

「旧二宮町は社会教育が盛んなところで、高校を卒業したころ公民館に青年団のメンバーが毎日のように集まって活動していました。わたしも先輩たちからよくかわいがってもらいましたよ(笑)。たわいもない話をしているだけなのに、いつしか仲間との絆はぐくまれる——。そんな原体験が、その後の女性会活動につながっています」

22歳で地元の青年団でいっしょに活動してきた同級生の忠秀さんと結婚。猪野さん自身も農協の正組合員となり、後にみそ造りに誘われて若妻会に加入した。

「かつては、農協に生活センターがあって、有線放送で『サンマが入荷しました』とか、『暮れの売り出しセール中』などの案内があると、農協によく人が集まっていました。情報交換しながら、人とのつながりが自然と生まれるような環境にありました」

若妻会やJA女性会では、料理教室や子どもの農業体験、直売活動、福祉活動など、さまざまな活動を展開。JA女性会や県女性会の役員にも就き、長年リーダーとして個々が主体的に活動する女性会をめざしてきた。

その方策の一つが女性会で組織する実行倶楽部だ。「文化倶楽部」「地産地消倶楽部」「編集倶楽部」など、会員ニーズの高い分野の専門グループをつくって、支部活動とは別に活動する。たとえば、文化倶楽部は年1回の女性会フェスティバルの企画立案から運営までを担当し、地産地消倶楽部は郷土料理や野菜料理などを伝承する活動を展開する。それぞれの倶楽部の役員は、他の女性会員に呼びかけて参加を促し、主体的に運営する。その経験が個々の成長につながっていくと猪野さんは話す。

「女性会員には、一人ひとりの出番をつくることを心がけました。活動のなかで大切にしてきたことは、『あなたもわたしもみんなが主役』というスタンス。互いを尊重し合うその先に、仲間たちを応援する力が育まれてきます」

■ 学びによって、自覚が生まれ行動が変わる

楽しい活動だけでなく、仲間同士の学びの場をつくることにも力を入れる。アンテナを高く張り情報や知識を得ることで、しだいに発言する力もついてくると考えるからだ。

「会合があれば、毎回終わるころにそれぞれが感想を話す時間を設けて、率直な意見交換ができるようにしています。自分の意見を持つことや発言することを繰り返していくことによって、エンパワーメントにつながり、地に足がついた活動ができると実感しています。そんな仲間たちの成長する姿をみるのが楽しみです」

発言することに初めは尻込みしていた仲間からも「話しやすい雰囲気をつくってくれた」「自分の考えを話すことで小さな自信がついた」と、感謝されることも多いという。小さな努力の積み重ねによって、自覚が生まれて、行動が変わる、



取材日は、JAの二宮支店の店舗前で年金感謝祭が開かれていた。若い職員とのコミュニケーションも積極的に行っている

そして大きな事を成し遂げることができる——。二宮尊徳の『積小為大』の考え方を地で行く組織づくりを実現している。

■ 次世代のネットワークづくりを応援する

一方で、女性のJ A運営参画は長年のテーマとして心を砕いた。正組合員として出席するJ Aの会合には女性が少ないこと、さらに女性が発言する機会もほとんどないことに、違和感を覚えた。地産地消や食農教育など、地域活性化のために活動する女性たちのパワーを生かしたい——。その思いで、1000人を目標とした女性組合員増員運動や、30人の女性総代の実現に奮闘する。みずからも、総代、参与、理事などに手を挙げて、率先して役割を果たしてきた。その姿は範となって、猪野さんの後に地域の女性が一人また一人と続く事象が生まれている。

「わたしにできることは、みんなにもできると確信しています。後進の育成のため、女性の潜在的な力を発揮できる環境をつくりたい。わたし自身も多くの人との出会いや縁があって、今の自分があると感じています。これまで培ったことを、次の世代に伝えていきたい。次世代のネットワークづくりに力を貸したいと考えています」



自宅から約200メートル離れた場所に、二宮尊徳資料館があり隣接した敷地に桜町陣屋跡がある



(株)雄の副社長である猪野さんと専務の猪野麻美さん(長女)は、イチゴジャムなどの加工販売を手がける。「道の駅にのみや」やインターネットなどで販売。また農業理解のための体験イベントを実施している。

これまでの人脈を生かした多様な仲間づくりも新たに始めている。県内の女性農業者を中心としたメンバーで構成する「下野わくわく塾」の開塾である。女性の社会参画を進めるために、2023年7月にスタート。大学教授の講義やワークショップなどに、月1回20~30人が参加する。2024年10月には、協同組合の魅力と課題について学び、助け合いや仲間づくりの原点に立ち返る契機となった。

出演するラジオ番組のエンディング曲には、S M A Pの『世界に一つだけの花』がゆったりと流れる。一人ひとり思い思いの花を咲かせるために、個性を尊重した協同の仲間づくりから、社会参画の輪を広げる一歩になると思いを強くしている。